

友が、十一世紀末に大野荘に入部した惟基の子が、一
様に惟基を領王化する速度に疑問があり、それ以前の宇
佐大神氏の影響については、全くつかめないでいる。そ
のためにも、宇佐大神氏庶流の祝氏にある「惟」字を通
名とする年代数とか、一族の流れを一番知りたいと思っ
ている。

更に、宇佐八幡を勧請した大野八幡宮の成立について、
宇佐大神惟基の大野荘八部以前か以後かと、庶流の
惟基と宇佐八幡の關係、日向配流の杜女のおとと惟基の
關係など、知りたいたいが一杯出てくる。中野博士によ
ると、大野郡と八幡神の關係ができたのは、天平勝堅二
年（七五〇）二月二十九日（宇佐大鏡）とし、宇佐大神氏と古
い關係のある大野荘に、かりに行政官として入った大和
大神氏との間に、親縁關係は誰と考へなくてよいかなど、
面白い発想も落かんでくる。

私は、歴史の空白の中に、その尊嚴と意味の悔さをい
つとも知らされていゝ。そして、壇がねばならない空白の
資料集めも大へんな仕事である。こんな時、先に羽柴先
生が提案した、各年代別や項目別の研究班を思い出す。
これらが相互の資料を持ちより研究すれば、一つづつ新
しい分野が拓けるかもしれない。

郷里の歴史は、学者や研究者の本題に關連した余暇の
仕事ではなく、一つのテーマに純粹にとり組み、「史談」
紙上を賑わすのは、楽しい学習であり、一つの使命でさ
えあると思つていゝ。
(おわり)

叢書

清州佐伯村おぼえ書 (十三)

へ第十次昌國佐伯開拓田小史

會員 矢野 徳 弥

四 自立への準備

「清州のウクライナ」といわれる、遼河中流の穀倉地
帯に位置する、地の利、と、温和と勤勉な同郷人の集団
が生む、人の和に支えられ、順調な歩みを進めてきた佐
伯開拓団は、余すところ後一年で、その建設を終る見通
しとなった。このまま進めば、康徳十三年（昭和二十一
年）の春には、めでたく「清州佐伯村」が誕生するので
ある。十九年に入ると、この日に備えるいくつかの動き
が見られるようになった。

〔部落名の改称〕

本隊が入り、団の北部に二つの部落が設けられたこと
により、当初から構想された地域内の部落配置は、これ
でほぼ終了した。団ではこの機会にとらえ、かねて団員
達から出されていた要望を入れ、部落の原地名を、日本
式に改称することとし、四月一日から実施した。

○豊栄（とよさか）

弥野の頭文字を変えたと思われる。

先遣隊がはじめて足き入れた郭家と、郭牛園を合わせ、この名称とした。

主として、明治・上野両村の出身者が居住する。

○大平(おおひら)

豊原と同じく、佐伯村の先発地区の一つである。全員

直見村の出身者で占める。

この名称はあまり馴染めず、もっぱら大平山で通すこととなる。

○八方(やかた)

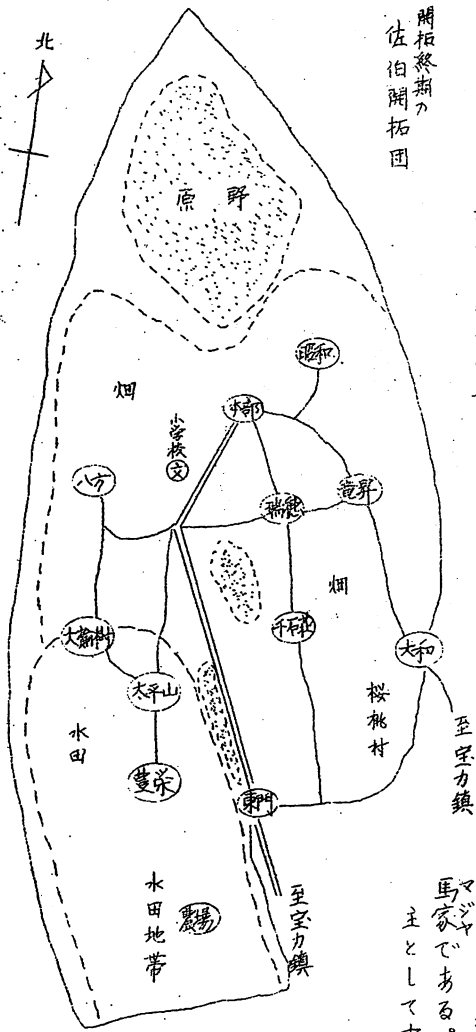
本来、八紘としたが、読みが固いのでこのようにした。旧称及六馬家、別名 北山部落という。

上野村出身の北山兄弟を中心、その縁故者が多く入る。

○大楡樹(だいゆじか)

文字は変えず、読みだけ日本式とした。原地名はタイヨウジユと発音されていた。

開拓初期の佐伯開拓団



主として川原木出身者が入る。

○東門(とうもん)

國の東南、開拓道路の入口にあり、文字どおり、佐伯村の東の玄関にあたる。旧称は長嶺子である。なお、報國農場はこの部落の西方ニキロの位置にある。

主として佐伯市よりの転業者が入る。

○大和(やまと)

陸奥の故事からとったと思われる。旧称は菅海とい、空力嶺からの近道(旧道)を通ると、ここが佐伯村の始まりである。

ほとんど、因尾村出身者で占める。

○龍昇(りゅうしょう)

リウシウオプシ(文字不詳)の原地名下、この文字を当てたものである。

主として、因尾村出身の新団員が入る。

○瑞穂(みずほ)

豊原原瑞穂の園からとったものである。旧称は四馬家である。

主として中野村出身者、及び津久見村出身者が入る。新名はあまり馴染めず、四馬家がいつまでも使われた。

○昭和(しょうわ)

地区内で一番新しい部落である。新団員の入植前に、本部で準備した名称で、旧称は後六馬家である。

ここには、因尾村以外の新団員が入ったが、小野市村、明治村の入連が多数を占めた。

○千石荘(せんごくそう)

旧称三合荘の、三合を千石に改えたのである。本
部勤務者が中心で、出身町村には関係ない。

「幹部の自立準備」

昭和十九年に入り、団は、新村移行後もそのまま残留
することが決められた。四人の幹部に対し、畑地の復配
分を行なつた。

もともと、開拓団幹部の身分は、大東亜省嘱託の専任
府職員で、その任期は開拓団の建設終了までの、通常五
か年であった。したがって、任期満了の後、再び開拓団
の幹部として他へ赴くか、辞して他の職業に就くかは、
全く拘束されなかつたが、佐伯村のような分村開拓団に
あつては、その成立の経緯からして、主導的役割を果た
した幹部の残留は、むしろ当然のことであつた。

かくて、團長矢野武吉、経理指導員出納研、農事
指導員金田豊の残留は、早くから決められていた。

團長矢野武吉については、早くも任期明けを待つて満
州開拓公社に入るよう、宗光考理事の強い誘いがあつ
たが、これを断り続けていた。そして五月に入り、本部
宿舍を出て本部前の、旧奉仕隊宿舎跡に居を構え、家族
招致(当面子供二人)を行なつた。

この頃、出納指導員は早くから家族を迎えていたし、
独身の金田指導員もまた結婚して一家を構えるなど、幹
部の自立準備は進展を見せていた。そして新たに宮崎県
出身で、途中赴任して来た守永指導員も残留を希望した
ので、合せて四名となつたのである。

ところで、幹部のうち、飯野畜産指導員は、当然なが
ら残留を希望しなかつた。さきにも記したとおり、同指
導員は事情あつて最初の赴任地、東京興安開拓団をばな

れ、前年六月に佐伯開拓団に迎えられたが、小動物専門
の学究肌の人で、野性の強い開拓地の風土に容易に馴染
めず、在任一年で再び他へ転出してしまつた。
なお、自立準備と関連が乏しいが、医師の交代につい
ても、ここで記しておこう。

診療所の江上医師が、在任三年になり転出の希望を示
したのでこれを認め、新しく金沢恵一郎医師を迎えた。
同医師は、福島県東白河郡石井村の出身で、哈爾濱開拓
医学院の最初の卒業生である。前任の江上医師は防疫関
係者から、現地開業医になつたらしく、巻た氏こそ、マ
ソチの燭で軽く焼いてから口にするほど神経質で、しば
しば不潔な患者への往診を恐れる傾向さえあつたが、新
任の金沢医師は、正反對の線の大い行動的な人物で、開
拓地にはうつつけの臨床医々と歓迎された。

「本部の強化」

新年度から、柳井光・吉長清治の二名に加え、新し
く近藤快豚 東雅勝の二名が本部書記となり、自
立に備えて本部事務向の強化が行なわれた。これに幹部
とともに九名、通訳(高)と給仕(玉田)を入れると
十一名が本部に勤務するようになり、母村の役場となん
ら疲らない人員規模となつた。

本部にはこの外に購売部があり、そこには燧川一也
門田善喜等がいて、管農資材の配給や、日用品の販売な
どの仕事に従事していたが、後に、本部資金係を合わせ
て業務組合の母体となることになり、明らかであつた。

なお、自立準備といえないが、この年の四月から郵便
物が毎日、本部まで配達されるようになった。これが一
つの前進である。到着した郵便は部落別の状差に入れら
れ、大抵は幸使で、その日のうちに本人に届くようにな

つたが、毎日、乗馬で新聞を受領にくる団員も、何名か見受けられるようになった。

〔管農の発展〕

入植第四年に入り、開拓道路を境に、西側の地区はすでに完成に近く、十六年・十七日入植組を中心に、団員農家の経営は著しい発展を見せ、農家それぞれが創意を生かした特色のある経営事例が見られるようになった。その一、二を紹介しておこう。

○積極的な畜産経営

大榆樹に植った三浦 一の経営規模は、次のようなものであった。

- 水田 一町四反
- 畑 七町 (自己所有)
- 畑 十七町 (現地の地主より借地)
- 家畜 日本馬 一 蒙古馬 二
- 騾馬 二 (雌馬に成る雄を配したも)
- 羊 二 豚 五〇余頭
- 使用人 若力頭 一 牧童 一

畑作は、自己所有の耕地で満足せず、団の区域外の地主から十七町歩も借用して大型経営を行ない、余剰の穀物を飼料に、五十頭の豚を飼育し、相当の現金収入を挙げた。

○稲作方式の改善

八方にいた兒玉 紘は、稲作に内地の方式を生かした新しい方法を案出し、十八、十九兩年にわたる試作で非常な成功をおさめ、本部でも正式に採り上げて、普及を図ろうとするまでになった。

その方法は、次のようなものであった。
1 秋の獲り入れが終ると、直ちに全面耕起を行ない、

冬の風を曝す。

2 春になり通水(毎年五月一日と決められている)と同時に、深く湛水する。

3 通水が及ぶと種籾の浸漬をはじめ、一週間後に苗床に播種する。

4 水を湛えた田には、雑草が一せいに芽を出し、もやしのように伸びてくる。頃合いを見て一挙に落水し、伸びた雑草を刈り払う。

5 数日後、雑草の枯死した水田に水を入れ、荒代をとる。

6 このあと、内地と同じく綱を張り、柿苗で田植えを行なう。

この方式は、植付けが多少面倒であったが、除草の手間が著しく省けた上、かなりの増収となったのである。

○その他

この外は、大和にいた柳井 勇や、若林 平太郎などは、西瓜と甜瓜(まくわ)の栽培でかなりの現金収入を挙げた。また、豊栄の矢野 到日、ぶどうの栽培と熱心に取組むなど、意欲的で新しい動きがあちこちで見られるようになっていた。

なお、手許にある資料から、当時の主穀の供出量を拾って見ると、(十九年実績)。

大和にいた清田光之は、長男、次男の二戸分を合わせ、水田三町五反を経営し、米百五十俵を供出、畑十町歩を耕作、高粱八十俵を供出している。

また、東門にいた麻生正夫は、米六十俵、大豆三十俵、高粱四十俵を供出した記録があるが、この麻生の例が、当時の一般団員の平均的な供出量と思われる。一応營養の安定をうかがわせる数字と見ることができよう。

(つづく)